

暗示の壁

ふゆきたかし



暗示の壁

ふゆきたかし

文藝春秋

著者略歴 一九三〇年宮崎市に生まる。津田スクールオブビジネス卒業後、貿易会社を興すが二〇年を経て倒産。以後執筆に専念。作品として児童文学「黄泉の湯」、「きよなら妖精」、SF小説「エピソード1イロル」等あり。一九九〇年第八回サントリーミステリー大賞で本書「暗示の壁」が佳作賞となる。

暗示の壁

平成二年九月十五日 第一刷

著 者 ふゆきたかし

発行者 豊田健次

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三―二三
電話代表(〇三)二六五―二二二一

印刷所 凸版印刷

製本所 矢嶋製本

定価はカバーに表示してあります

暗示の壁

俺は、持ち重りのするデシレのカップからコーヒーを啜りながら、窓の外を眺めていた。俺の事務所がある裏通りは、車の往来も人通りも多くはない。華やかなショップウインドウもないし、太陽の光も、空気も、表通りよりは薄いような気がする。そのうそ寒い通りに、突然、華麗な色彩が現れた。女が二人、曲がり角に立って、あたりを見まわしている。距離があるので、顔は判らないが、二人とも、人目に立つ身なりをしている。派手というのではないが、垢抜けているというのか、高級な装いが板についている感じなのだ。その二人が、こちらへ向かって歩き出した。俺は、目で、その二人を追い続けた。特別な関心があったわけではない。女は、特に美しい女は、いつでも見ても楽しい。ただそれだけのことだった。その二人の女が、俺の事務所の前で立ち止まった。一人は辺りを見回し、一人は看板を見ている。その見回している女の目と俺の目が合った。俺は自分の城にいる強みで、まともに女を見ていた。しかし、女のほうも、目を逸らさずに俺を見ている。俺のほうが気が引けてきたとき、看板を見ていた女が俺を見ている女に何か言った。女は振り返り、何か言葉を交わし、そして、事務所の入口へと歩いてきた。

ドアがノックされた。俺は訝りながらドアを開けた。依頼者だろうなどとは思いませんでした。

言ってみれば、客種が違ふのだ。ドアの外には、華麗きわまりない大輪の花が香り豊かに咲き誇っていた。俺は、ほとんど、圧倒されていた。しかし、すぐに立ち直った。二人の正体の見当が付いたのだ。何とか生命の勧誘員に決まっていた。俺は感心もしたが、可笑しくもなった。最近の生命保険の勧誘員は、トップクラスのキャリヤウーマン風なのだ。しかし、俺のところへ勧誘にくるなどは、ほやほやの新米に決まっていた。

大輪の花の一方が言った。

「この事務所の方でしょうか」

くろぐろと艶やかな短めのおかっぱが、まず、眼に入った。端正に切り揃えられた美しい髪だった。その艶やかな黒髪が、陶器のように滑らかで抜けるように白い肌の瓜実顔を、鮮やかに縁取っている。年は二十七か八だろう。目が印象的だった。長く弧を描いた眉の下に、瞬きの少ない大きな目がある。濁りのまるでない澄み切った白眼に、黒い大きな瞳が開いている。この目で見つめられた者は、長い間この目の映像から逃れられないに違いない。俺は、その目にうなずきながら言った。

「そうですけど」

もう一人の女が言った。

「獅子井昌平さまでしょうか」

丁寧すぎる言葉遣いだったが、取って付けたような感じはなかった。三十六、いや、七にはなっているだろう。やや面長で、顔の輪郭に穏やかな膨らみがある。唇がよかった。ふっくらと膨らみがあって、いかにも柔らかさそうなのだ。しっとりとした潤いもある。こんな唇に唇を重ねると、さぞかし気持ちが悪く落ちて着くに違いない。もう一人に比べると、刺激的な要素は少なかったが、

美人という点では、勝り劣りはなかった。俺は言った。

「そうです。私が、獅子井昌平です」

唇のふつくらとした女がくちごもった。

「あのう……」

俺は言った。

「何ですか」

陶器の肌が横から言った。

「中に入れとはおっしゃいませんの？ 私達、ひよっとすると、客かもしれませんのよ」

声のどこかに、ごく微かだが、皮肉とも嘲りともつかぬ調子がある。俺は、一瞬、顔が赤くなりかけたが、何とか堪えて、二人を中に入れた。

俺は何気なさそうに視線を移しながら、ソファーに腰掛けている二人の女を観察した。二人とも、きちっと膝頭を閉じていたが、陶器の肌をした女の方が足の倒し方が大きかった。二人とも形のいい足をしていたが、陶器の肌の女の足は、印象的だった。やや細すぎるような気もするふくらはぎが、細く締まった足首から、きりっと引き締まった膝頭まで、滑らかで緩やかな弧を描いている。その膝頭が素晴らしかった。肉が薄く、皮膚が薄く、象牙に彫刻したように、磨き抜かれた滑らかな固さを感じさせるのだ。一瞬だが、俺は妙な想像をした。あの象牙の膝頭で胸を押しえられたら、俺は、どんなふうに燃え上がるだろうか。

俺は我に返った。唇がふつくらとしている方の女が言っている。

「あの、絶対に秘密は守っていただけるのでしょうか」

俺は女を見た。逆らう気はなかったが、声の調子が悲劇的すぎた。

「依頼者の秘密は可能な限り守ろうと思ってます。でも、絶対って言われると、あんまり自信はないですね」

ひねくれているつもりはなかったし、逆らうつもりもなかったのだが、悲劇的すぎる女の声の調子に、つい、身構えてしまったのだらう。陶器の肌をした女が言った。

「どんな場合に依頼者を裏切るのか、参考までに教えていただけませんかしら」

声にわざとらしい不安があった。俺は、むかっとした。こんな程度のことでは熱くならないはずなのだが、滅多にないような大輪の花を前にして、やっぱり力んでいたのだらうか。俺は、わざとらしい誠実さを顔に出して言った。

「第一に、生命の危険のある場合です。第二に、身体に重大な危害を加えられそうな場合です。

第三に、大金を提供された場合です。最後に、いや最後じゃないかも知れないけど、美人に誘惑された場合です」

女の唇がかすかに歪んだ。

「一言で言えば、節操なんて、まるでお有りにならないのね」

俺は微笑んで見せた。

「そうなりますかね。でも、あなた程度の美人の誘惑になら、多分、堪えられると思いますけどね」

女の白い顔が赤く染まり、目が驚くほど陰しくなった。俺は後悔していた。多少の嫌みを言われたからといって、侮辱してもいいということにはならない。だいいち、女は素晴らしい美人だった。それにしても、この女は、侮辱に過敏なのだ。

気まずい何十秒かがあった。唇がふっくらとしている女が、はらはらしたような声で言った。

「あのう、人の命がかかっていることなんです。ですから……」

暫く考えてから、俺は言った。

「そういうことなら、こんな所に来ないで、警察とか、もっと組織のしっかりした探偵社に行かれるべきです」

女は、陶器の肌を振り返った。陶器の肌が、自分を押さえているらしい声で言った。

「あなたにお願いしたいのです」

俺は女の目を見ながら言った。

「なぜですか」

女は俺の目を見返しながら言った。

「理由は言えません」

女の目が強すぎるような気がした。腹を立てているのだろうか、外にも理由があるのだろうか。俺は唇がふっくらとしている女の方に向き直った。

「そういうことでしたら、ご用件の方も伺わないことにしましょう」

女は救いを求めるように、もう一度、陶器の肌の女を見た。陶器の肌が言った。

「理由なんかどうでもいいでしょう。ぜひあなたにお願いしたいと言っているのですから」
声に、少しだが、苛立ちが出ている。俺は、唇がふっくらとしている女に言った。

「どうでもいいかどうかは、私に判断させてくれませんか」

陶器の肌の女が言った。

「成功報酬として、大金を提供しますよ。規定の料金も、倍額、お払います」

俺は心が動いた。ここ暫く金になる仕事がなかったのだ。それなのに、口は別なことを言っていた。

「匿名の手紙は読むなっていうのと、理由の判らない仕事はするなっていうのが、死んだ親父の遺言なんです」

長い沈黙があった。俺は完全に後悔していた。久しぶりで金になりそうな仕事を、子供じみた意地を張ってふいにしたのだ。

陶器の肌の女が真っ直ぐに俺の目を見ていた。俺は、たじろいだ。こんなふうに、そうだ、まるで、俺の中に、もう一人の俺を見つけようとでもするかのように目を覗き込まれたことなんか、今までに一度もなかったからだ。

女が静かな声で言った。

「私の態度がお気に入らないのね」

余裕を取り戻すためには、苦笑して見せる以外に方法はなかった。

「そんなことはありませんよ」

陶器の肌の女は、意外なほど、素直な声で言った。

「ごめんなさい。謝ります。貴方を選んだ理由は、その日がきたら、私のほうから申し上げますし、自然に判って戴けるかもしれません」

気にはなっていたが、俺を選んだ理由が判らなければ、仕事はできないということもない。俺も素直な気持ちで言った。

「態度が良くなかったのは、私のほうでした。すみません」

唇がふっくらとしている方の女が、ほっとしたように言った。

「人の命に係わることですもの、亡くなったお父様も、仕事をするを、きっと許して下さいますわ」

冗談かと思つたが、女は大真面目だった。この女はとことん善良に違いないと俺は思つた。

陶器の肌の女は長沢和子と名乗り、唇がふっくらとしている方の女は、松岡重子と名乗った。二人は友人だと言つた。俺は改めて長沢和子の顔を見た。名前をどこかで聞いたことがあるような気がしたので、うまく思い出せなかつた。長沢和子が話し始めた。松岡重子の八歳になる男の子が誘拐された、と言うのだ。

四月二十八日の木曜日、午後三時頃だった。かかつてきた電話をお手伝いがとると、若い男の聲が、子供を預かっている、と言ひ、そのまま切れた。ちょうど外から帰ってきた重子は、すぐに学校に電話をしたが、小学校五年と三年になる二人の男の子は、すでに下校していた。長男の洋太は間もなく帰ってきたが、先に学校を出たはずの、次男の弘道は帰って来なかつた。弘道が仲良くしている子供の家に電話をすると、学校を出るときは一緒だったが、弘道は、途中で、赤い車に乗って行つてしまつた、とその子供は言つた。

夜になつても弘道は帰つて来なかつた。重子の夫は警察に電話をし、警察はすぐに来てくれて、犯人からの連絡に備えてもくれ、捜査も始めてくれたが、十日余りたった今も、何の手がかりも得られていなかった。

俺は重子に聞いた。

「犯人からの連絡は？」

重子は首を振った。俺は、こだわるつもりではなかったのだから、前にもした質問をもう一度した。

「どうして私なんか頼む気になったんですか。日本の警察は優秀ですよ」

重子は和子を見た。和子が微笑みながら言った。

「何もしないでただ待っているのは、とても耐えられないって重子さんが言いますので、私立探偵を頼もうということになったんです」

ポイントを微妙にはずした答え方だった。俺はあらためて不思議に思った。俺を選んだ理由をどうして隠したがるのだろうか。

俺は和子の表情を読もうと努力しながら尋ねた。

「私立探偵を頼むということを、警察は了承してくれたんですね」

和子は俺の目を見返しながら言った。

「警察の了解を得なくてはいけませんか」

「勿論です」

和子は微笑みながら、子供でも有めるような調子で言った。

「あなたはあなたで捜査なさればいいじゃないですか」

俺は何も言わずに、ただ首を振った。和子のどこことなく見下しているような態度も気にいらなかったし、素人を相手に議論をするような問題ではなかった。

重子が哀願するように言った。

「警察には、すぐお話しします。いいでしょ、和子さん」

何か考えているのか返事をしない和子を、重子が、やさしく促すように振り返った。何秒かの間があつてから、和子がゆっくりと頷いた。

俺は規定料金の説明をし、調査依頼の申込書を重子の前に置きながら、二人の顔を見較べた。

「伺つておきたいのですが、お二人はどういうご関係なのでしょうか」

特別な意味はなかった。上流階級の間人と思える美しい女が二人、只事ならず、親しげなことへの好奇心のようなものだった。

「いろいろと親身な相談に乗っていただいている特別なお友達です」

微笑みを和子へ送りながら重子は言ったが、その微笑みには、へりくだりというか、つつましきさというか、何か特別な感情が込められているように見えた。

重子はバッグから、分厚い封筒を取り出してテーブルに置いた。

「百万円あります。着手金のつもりで用意して参ったのですが、規定料金の一箇月分を、明日、お振込みします」

和子が事務的な調子で言い添えた。

「無事に子供を取り戻して下さったら、五百万円差し上げます。身代金を取り戻して下さったら、更に、その一割を差し上げます」

俺は黙つて和子の顔を見ていた。どんなに親しい間柄だろうと、友人が、こんなに立ち入った発言をするだろうか。ひょっとしたら、この二人は、友人以上の特殊な関係にあるのではないだろうか。俺は特殊な性的関係を考えたわけでもなかったが、そういう可能性も想像できないこと

もなかった。もしそうだとすると、男役は和子の方に違いない。俺はそういう女を体験したことはなかったが、大いに興味はあった。そういう女は普通の女よりも性的情熱が逞しいような気がするのだが、勿論、俺の勝手な妄想に違いない。

俺は和子を見た。どんなセックスを楽しむのかは別として、和子が強くて情熱的な女であることに間違いはなさそうだった。和子の口は、時に、強く引き結ばれ、顎が固く引き締まり、同時に、目に強い光が現れた。俺は、和子の胸の中でどんな火が燃えているのか知ることができものなら、知りたいような気がした。

九品桜署の松村警部は、とにかく、会ってはいくらも話した。俺は初対面の挨拶をし、いきさつを話した。松村は何も言わずに俺の顔を見ていた。五十前後だろうか、角ばって日焼けしたその顔には、隠すつもりもないらしい不機嫌がはつきりと現れていた。

捜査の邪魔をするつもりはありません、と俺が言う、と、松村は重い声で、当り前でしよう、と言った。今までに判っていることを教えて戴きませんか、と俺が言う、金を稼ぐのなら、自分の足で稼いだらどうですか、と言った。俺はとって置きの愛想のいい笑顔を作って見せてから、今のは、優秀な日本の警察に対する尊敬の言葉のつもりだったのですが、と言った。松村は、顔は赤みをおび、目は陰しくなったが、何も言わなかった。

松岡家は石神井の少し奥まった所にあった。五、六百坪以上はあると思われる敷地は、少し高すぎる大谷石の塀と頑丈すぎる鉄の門扉で囲まれ、隣家との境には深すぎる木立があった。

俺はインタホンのボタンを押して名前を名乗ったが、頑丈な門扉が開くまでに、五分は待たな

ければならなかった。俺は中つ腹な気分になりかけていたが、警察の指示に従っているのかも知れないし、今は、必要以上に用心深くなっているのだろうと、思い直した。

四十過ぎの女が案内してくれた応接間では、すでに、重子と和子が待っていた。俺を見ると、重子は立ち上がって、丁重すぎるほど丁重に頭を下げた。犯人から連絡があったかどうかを尋ねると、重子は首を振った。運んできた紅茶をテーブルに置いた四十過ぎの女は、椅子を運んできて、重子の斜め後ろに腰を下ろした。俺は素早く女を観察した。歳は四十三か、四だろうか、艶のない白い肌と痩せた体を持つている。鼻も口も形よく整っているのに、目が小さく、その目には輝きがない。そして、閉じてはいるのに、口には締まりがない。俺は忠実でおとなしいロバを想像した。俺は、この手の女にものを聞く時は、ごく当り障りのない質問から始めることにしている。

「ここにお世話になるようになってから、もう長いんですか」

「はい、あのう……」

言葉がとぎれたのは正確な年数を思い出そうとしているのかと思ったが、いつまで待ってもその後にはなかった。俺は世間話でもするような調子で言った。

「びっくりしたでしょう、妙な電話がかかってきた時は」

何の話か判らなかつたと見えて、返事が来るまでに、何秒かの間があった。

「はい、びっくりしました」

声に何の感情も込められていないのは、すでに、散々、警察の質問攻めにあったからなのだろうか。

「何て言っただんですか」

「はい？」

「この坊ちゃんを誘拐したって、電話があっただんじょう」

「はい」

「何て言っただんですか」

「ですから、坊ちゃんを誘拐したって……」

「そういう言い方で言っただんですか」

「はい……」

声があやふやになった。

「聞いた通りに言ってくれませんか」

「ええと、坊ちゃんを……」

「坊ちゃんって言っただんですか」

暫くぼんやりと俺を見ていた女が、助けを求めるように和子と重子を見た。和子が励ますように言った。

「間違えてもいいから、覚えているとおりに言ってご覧なさい」

女は、目を、のろのろと俺に戻しながら、言った。

「たしか、子供って言いました」

「子供をどうしたって言っただんですか」

「預かったって、そう言いました」

「子供を預かった。それだけですか」